

<金融史パネル>

地方銀行の自己資本と経営行動：戦前期の多摩を事例に

愛知大学 早川大介

本報告では、戦前期の東京府多摩地域に存在した地方銀行を事例に、それらの銀行の自己資本と経営行動の関係について考察する。

多摩は、三多摩（北多摩郡・南多摩郡・西多摩郡）とも呼ばれ、1896年に神奈川県から東京府に編入された地域である。南多摩郡の中心の八王子、西多摩郡の中心の青梅は、織物の集散地として古くから知られ、金融機関も設立された。1880年代には八王子に第三十六国立銀行、八王子銀行（後の八王子第七十八銀行）が、青梅には青梅銀行が設立されている。その後、1890年代半ば以降の銀行設立ブームの中で、地域産業の資金需要を背景としながら、地元の資産家を中心に多くの銀行が設立された。1900年代前半には多摩地域に約20行が設立されるに至った。これらの銀行の中には短命のものもあったが、1920年半ばまで存続したものも数多くあった。これらの中小地方銀行は、八王子の第三十六銀行（1917年より安田財閥の傘下）、青梅の武陽銀行の二行に合流した後、最終的には安田銀行（戦後、富士銀行を経てみずほ銀行）に合併された（多摩の店舗は埼玉銀行に譲渡）。

本報告では、第一に『銀行会社要録』を利用して、1899年から1925年までのおおよそ5年ごと6時点の多摩の銀行経営の推移を概観する。『銀行会社要録』には各銀行の自己資本や預金、貸出金、有価証券などのデータが掲載されており、銀行設立ブームから1901年、1907年の金融恐慌、第一次世界大戦のブームとその崩壊を経て、多摩の銀行の資金源泉と資金運用がどのように変化していったかを確認する。

第二に個別銀行の事例を考察する。取り上げる事例は①第三十六銀行、②氷川銀行である。①は、八王子に本拠を置く多摩で最古の銀行で、日露戦後には経営不振に陥って安田財閥の下で経営再建が行われた。多摩の市街地での大規模な銀行経営の事例として考察する。②は1897年に西多摩郡氷川村（現奥多摩町）に設立され、1927年に武陽銀行に合併するまで存続した。山間部での中小の銀行経営の事例として考察する。以上の多摩の銀行のデータと個別事例から、明治・大正期の地方銀行の経営の一端を明らかにしたい。